

「江東内部河川・運河の活用とコミュニティ強化」プロジェクト

代表者	志村秀明【教授】(建築学部 建築学科)
構成員	原田真宏、桑田仁、佐藤宏亮、前田英寿、本多久美子(建築学部 建築学科)／岩倉成志(工学部 土木工学科)

■プロジェクトの概要

東京湾岸地域の社会課題である河川や運河の活用やコミュニティ強化をテーマとして、学生が市民やNPO、民間事業者、自治体と協働しながら、課題発見から解決方法の提示までを行い、教育効果を高め、先進的な研究を促進し、更に社会貢献まで同時に実現する。本学のブランド向上にも貢献する。講義科目から演習科目、ゼミナール科目や卒業研究までを相互に連携させることで、教育・研究・社会貢献の質を高める。単なる教育や研究に終わらず、まちづくりに関わる地域の人材を育成することで、教育・研究・社会貢献の新たな展開を狙う。「豊洲地区運河ルネサンス協議会」や「せんなんまち結い会」といった地域のまちづくり組織と連携することで、最先端で自律的なイノベーション創出・人材育成拠点を形成する。

■地域志向(COC)活動助成プロジェクトの成果

【教育】

学生は、講義科目で地域課題を理解し、PBLの形式をとるゼミナールや演習で地域課題の解決に取り組んだ。建築学科では、「都市地域計画」や「地域設計論」で地域課題を理解し、「プロジェクトゼミ」や「空間地域デザイン演習」で江東区や中央区の地域課題の解決に取り組んだ。また大学院では、「まちづくり特論」「都市計画総論」「Urban and Community Design」で地域課題を理解し、「建築学演習・都市地域デザイン」で地域課題の解決に取り組んだ。

特に「プロジェクトゼミ」では、江東区千田の美術館通りで、地元のまちづくり組織と連携してシャッターアートなどを制作した。

【研究】

アクション・リサーチの手法にもとづき、卒業研究として、中央区佃・月島の地域雑誌に関する研究、豊洲スマートシティプロジェクトに関する研究、江東区猿江の同潤会アパートの公共ストックの継承に関する研究が取り組まれた。

また日本建築学会では、月島もんじゃストリートのテーマパーク化に関する研究、江東区北砂の空地通り抜け社会実験、画像生成AIを用いる将来イメージの検討方法に関する3本の研究が発表された。また日本都市計画学会では、豊洲運河クルーズに関するものなど2本の研究が発表された。さらに国際会議では、佃・月島に関する研究が発表された。

【社会貢献】

江東区豊洲では、「豊洲水彩まつり」を6月に開催し、学生たちはその企画補助とスタッフを務めた。特にその中の「運河クルーズ」では、東京湾岸地域の地歴について学修した上で、船上からの風景について分かりやすく、また楽しくガイドを行い大好評だった。

江東区千田では、11月に開催されたまちづくりイベント「せんなんまち結いマルシェ」の中で、「こどもみちおえかき」を開催して大盛況だった。

また福島県南会津町館岩地区では、10月に開催された集落再生活動「たのせふるさとまつり」などを11名の学生が支援するとともに、地域おこし協力隊を経た移住者に対するヒアリング調査も実施した。



豊洲水彩まつりでの運河クルーズ：学生たちの元気で楽しいガイドは大好評だった。



建築学演習・都市地域デザインの最終発表会：地元まちづくり協議会の会長や江東区、コンサルタントも参加した。



たのせふるさとまつり：学生たちは、イベントの準備や地元特産品の販売などをサポートした。

主なトピックス

プロジェクトゼミ 近隣商店街の再生デザイン

シャッターアート制作

地下鉄8号線新駅開業を見越して、地元のまちづくりの機運を高めたいという地元町会会長の要請で制作した。町会長と話し合った結果、地元のお祭りの様子を描くことになった。下絵の制作から実際のシャッターアートの制作までを、2025年9月～11月にかけて11名の学生たちが取り組んだ。

シャッターにペンキで絵を描くことは皆はじめてであり、試行錯誤しながら見事に完成させた。



シャッターアートの制作風景: 下絵をもとに、シャッターに鉛筆で下書きし、ペンキで描いていった。脚立などは、地元町会長から貸して頂いた。店舗の方からご飯やお菓子、お茶などの差し入れを頂き、そのような地元の方々との交流が学生たちにとって良い経験となった。



シャッターアートのお披露目式: 2025年11月30日に開催された「せんなんまち結いマルシェ」で、完成したシャッターアートのお披露目式が行われ、大久保朋果江東区長(写真中央)にも見て頂いた。地元ケーブルテレビでも紹介され、学生たちがインタビューに答えた。

こどもみちおえかき:

2025年11月30日に開催された「せんなんまち結いマルシェ」を支援する企画の一つとして開催した。学生たちは、中央区月島で開催された過去の記録を参照して企画・準備を進め、地元の方々とも打ち合わせをして実施にこぎつけた。

「こどもみちおえかき」は、チョークで道路に自由に絵を描くという、かつてはどのまちでも普通に見られた子どもの遊びを復活させるものである。



こどもみちおえかきの様子: 子どもだけで150名の参加と大盛況で、道路は子どもたちの絵で埋め尽くされた。学生たちは受付も行ったが、あまりの来場者の多さに大忙しだった。また学生たちには、子どもや親子との交流が良い経験となった。



こどもみちおえかきでの記念撮影: 視察に来られた大久保朋果江東区長と子どもたち、学生との記念撮影。学生たちにとっても良い思い出となった。この後、子どもたちが大挙して訪れ、学生たちは大忙ししながらも、このイベントを楽しんだ。

空間地域デザイン演習 地域資源を活用するコミュニティ・デザイン

建築学科SAコース3年生「空間地域デザイン演習」は、課題テーマを「地域資源の解説、地域資源を活用するコミュニティ・デザイン」、対象地区を「佃・月島」として開講した。留学生3名を含む24名の履修者が5つのグループに分かれて、「定量的視点から見る月島・佃の再生」「地元から愛される商店街へ」「商店街事務所のリノベーション」「月島飲食店リノベーション・ガイドライン」「鉢植えがつくる『おすそ分け』の景色」の提案制作に取り組んだ。

学生たちは、初回にフィールドワークを行い築100年を超える佃島旧飯田家住宅の保存・活用の取り組みなどを見学した。

最終回では、地元でまちづくり活動に取り組む市民2名をゲスト講評者としてお招きして、学生の提案についてコメントを頂いた。学生たちは学内の教員からの評価にとどまらず、実際の課題対象地区の市民から講評を得るという貴重な経験ができたことで、単なる演習以上の学修効果を得ることができた。



「鉢植えがつくる『おすそ分け』の景色」グループは、要求された成果物の図面に加えて、提案を手にとって多くの市民に見てもらいたいとのことからA5サイズの冊子『地域緑化ガイドブック』を制作した。地元市民の好評を得た。

タイプ1：ひな壇タイプ

鉢植えの高さに変化をつけてひな壇のように置かれた植栽のこと。全体が見えて美しく、通行の妨げにもなりにくい。



上: 授業最終回では、課題対象地区の市民2名をゲスト講評者としてお招きした。

左: 『地域緑化ガイドブック』の1ページ。佃・月島らしい鉢植えがいくつかのタイプに整理されて、イラストで表現されている。